

月刊

近代盆栽

SEP.2026
KINBON

<http://www.bonsai.co.jp>
昭和53年3月2日第3種郵便物認可
令和8年9月1日発行 (毎月1回1日発行)
通巻587号

9



特集

■ 多幹樹形を楽しむ

木村正彦・寄せ植え／藤川政幸・根連なり

特別企画 達人から樹づくりのコツを伝授！

■ お棚拝見&縮緬かずらの育て方

特別実技

■ 中国人研修生、修業最後の大仕事！

スcoop・トピックス

■ 盆栽水石・文化産業振興
議員連盟発足

■ 室内培養15ヵ月の石付真柏、
健やかな美姿を披露！



名古屋三越お客様サロン内に設置された「サイリウム」
(開発／(株)アイ・アンド・プラス Bloom Field 事業部)
と石付真柏盆栽。サロンの上質な空間に違和感なく溶け
込む上品な佇まい。

盆栽トピックス

室内培養15ヵ月の石付真柏、 健やかな美姿を披露！

長期室内展示用光源装置「サイリウム」で、
盆栽の室内展示の常識が変わる！

取材協力／(株)名古屋三越、盆栽いくま、(株)アイ・アンド・プラス



右から、「サイリウム」の開発に尽力した(株)アイ・アンド・プラス代表
取締役の井下郁夫氏、開発初期段階から全面協力してきた「盆栽いくま」
西岡悠太園主、真柏の管理のため毎月この場所を訪れる同園スタッフの
八代拓人さん。



「サイリウム」の光だけでの栽培開始からちょうど7ヵ月が経過した石
付真柏。12月の撮影だがきれいな緑色の葉色を保ち、栽培当初はほぼ
見られなかった苔が足元を覆っている。

石付真柏、室内での経過



2025年4月30日、樹齢約70年の石付真柏を設置。これから室内での培養が始まる。



2025年5月28日、1ヵ月後の様子。特に変調は見られず、青々と葉を茂らせる。



2025年10月29日、半年後。相変わらず調子は良く、この間に芽つみも施されている。

室内で盆栽を育て愛でるために

開発から特許取得、実用まで

前ページや上段でご紹介の通り、野趣あふれる石付真柏を室内で栽培する実験が行なわれ、真柏は1年以上という長期にわたって健やかな姿を維持し、現在も継続されている。これは「サイリウム」の登録商標で実用化された、「太陽に限りなく近い植物育成光源」があつてこそ。

開発したアイ・アンド・プラス社（代表取締役／井下都夫氏）はマーケティング・デザインを主業として発展してきたが、2004年の「浜名湖花博」にて、所属のガーデナー・Yoshio氏を中心にハウスメーカーのガーデニングデザインを担当。設計・施工・管理も手掛け、数々の賞を獲得した。同博で「モノの庭」を手掛けたトップガーデナー・玉崎弘志氏とも交流を深め、後に玉崎氏を取締役に加える形でガーデニング専門ブランド「ブルームフィールド」を立ち上げた。

玉崎氏との交流の中で、「都心部のマンションでベランダガーデンをやりたい人は多いが、消防法やマンション契約に引っかかるし、風が強いので乾燥がひどい、それをクリアする方法がないだろうか」という話題が出た。幾度も話し合ううち、ベランダや半屋外、室内でのガーデニングを実現するためのコンテナユニットというアイデアに行き着いた。

課題となったのが光である。光合成促進のため一般的なLEDを使用してみたが生育結果は悪く、また斑入りなど葉芸品種はグリーン一色になつてしまふ。様々な試行錯誤の中、静岡大学名誉教授でプラズマ現象研究家・神藤正士氏と話す機会を得て相談したところ、「いけるかもしれない」という返事。光の専門家との連携のもと、光源の開発と実証実験を繰り返して、ようやく実用に耐えるレベルの光源装置が完成。浜松市の新事業挑戦事業費補助金事業に採択されたことも追い風となり、システムコンテナと組み合わせ2023年に「ガーデンインテリア」の名で商品化した。

その光源は太陽光にごく近い波長になつていて、例えば光合成には緑の光、花芽分化には赤の光が必要と言われるが、一般的なLEDはそのバランスが太陽光とは全く違う。レタスやキャベツの「工場」のように単一の品種・目的なら光を特化させて照度や距離も決められるが、それでは「畑」になってしまう。もちろん培養に特化した光は太陽光とは全く異なった色になり、鑑賞面で満足できるものではない。いろんな植物を自然な光で鑑賞するスモールガーデンの姿にこだわっ

た結果、ようやく得られた光源だった。

「ガーデンインテリア」は喫茶店、病院、企業のロビーなどに導入され、好評を博した。そのうちユーザーから「盆栽はどうか」と話が来た。「長期出張で盆栽を室内に入れて家族に水やりを頼んだが、衰弱して枯れてしまった」という声もあった。浜松市内の盆栽園を調べて「盆栽いくま」に電話すると、園主の西岡悠太氏から「おもしろそうだから協力します。盆栽の研究を経て「ガーデンインテリア」の光源装置を改良、盆栽の特性に合わせて2灯にして照度を高め、実証実験を始めた。2024年3月より（一社）日本盆栽協会で中遠支部のメンバーや西岡氏らが実験に協力し、黒松や山アジサイの顕著な成長ぶりを確認した（この経緯は小誌2024年9月号でもご紹介）。

井下氏は「中遠支部のみならずはすくく一生懸命で、発想も新しくて柔軟な捉え方をしてくれる方々。以前から盆栽啓蒙に力を入れ、若い世代の人たちがインテリア感覚で盆栽を育てる時にちょうどいいんじゃないか、新しい分野に挑戦できるのではないかと、そんな後押しをしてくれました。ラッキーでした」と語る。こうして完成した「サイリウム」は、2024年に特許を取得。そしてこの度、15ヵ月におよぶ石付真柏盆栽の長期室内栽培を成功させたのである。

照射時間はタイマーで設定する。例えば名古屋三越お得意様サロンでは10〜12時間と、お店の営業時間に合わせた。ランブは目に見えないが照度が落ちる（照度計で測ると分かる）ため7千時間で交換。ランブ交換はユニットごと、顧客が簡単にできるような形で、宅配便で交換ユニットを送り、そのケースで送り戻してもらう。

普通家庭用コンセントから電源が取れるのもメリットで、1灯あたりわずか55ワット、月に300〜350円程度。盆栽用の「サイリウム」は2灯なのでランニングコストは月700円前後だ。もちろんシステム全体の価格は高価で、100万円を超える。しかし愛好家からの興味の声も届いており、今回長期展示がなされた名古屋三越の担当者から提案された「安価なものを」という案に応え、小さいめのタイプも制作し始めた。現在はスタンドライト（1灯）タイプ、ペンダントライト（1灯）タイプを販売している。もっと大きな盆栽にという希望があれば、3灯にするなどのカスタマイズは可能だという。

担当者が「ドリップのコヒーに水を注ぐように、苔に水が染み込むようにゆっくり注いでいます」とこだわりを見せる水やり。「サイリウム」のディスプレイシステムは、室内でそのまま水やりができ、余分な水は排水口から下のタンクに貯まる仕組み。



2025年12月1日、7ヵ月経過後。季節は冬、外で育てていればそろそろ葉が赤茶色を帯び始める頃だが、相変わらず葉の色・ツヤとも良好でみずみずしい。新芽も伸びているが、じつは1ヵ月前に芽つみしたという。足元の苔もよく育っている。

猛暑や大雨を避け、室内で太陽光なしで盆栽を愛でる。自動灌水機さえなかった頃から考えれば隔世の感があるが、実際に1年以上の成功例を目の当たりにすると、まぎれもない現実であることが分かる。現場で必要なのは水やりのみ。近年は様々なホテルや店舗などに盆栽が飾られる機会も増えたが、そういった盆栽のリース事業にもびったりの設備である。商品に関するご相談・お問合せについては、今月号104ページをご参照いただきたい。

石付真柏 培養の経過

- 2025.4.4 名古屋三越のお得意様サロンに「サイリウム」を設置、盆栽を展示。
- 2025.4.30 展示品を石付真柏に変更。以降は月1回、芽つみなどの手入れを施す。
- 2026.1.30 名古屋三越での展示期間終了につき、(株)アイ・アンド・プラスに移動。
- 2026.4.30 太陽光を全く当てず「サイリウム」環境となつて丸1年が経過。
- 2026.7.9 同環境15ヵ月目に入り、引き続き健康な生育状況を保っている。



2026年7月9日、(株)アイ・アンド・プラスにて。「サイリウム」の光のみでの栽培となつて1年と2ヵ月半、なんと15ヵ月目に入った石付真柏の姿。葉色や芽伸びも順調で、葉傷み・枝枯れ・間伸びも見られず、太陽光の下で培養された時と同様、引き締まった姿を保ち続けている。

